

みなと元町タウンニュース	2022年(令和4年)10月2日	みなと元町タウンニュース	2022年(令和4年)10月2日	みなと元町タウンニュース	2022年(令和4年)10月2日
海という名の本屋が消えた（108）	平野義昌	海という名の本屋が消えた（108）	平野義昌	海という名の本屋が消えた（108）	平野義昌

光村弥兵衛・利藻(6)

光村利藻の新社「光村出版部」も運転資金に悩む。豆千代が新橋芸妓に住み替えし、契約金を差し出した。竹内栖鳳がたびたび作品を寄贈してくれた。1916(大正5)年、「光村印刷」で安雲宗一の教えを受けた吉崎操が入社し、品質が向上。この頃利藻を晩年まで支えた中条与一(1915年)、吉村君子(17か18年頃)も入社している。17(大正6)年仁丹のおまけカードを受注。三菱製紙(三菱銀行から木村転任)と取引が始まる。京都朝日堂や東京石川商店など販売店から援助があり、工場を借り機械を増設できた。18(大正7)年神戸の安雲(同年独立開業)が技術指導に来社。新規受注は絵画複製販売の尚美堂、出版社の富山房、三省堂など。

同年第一次世界大戦終結。スペイン風邪が世界的に大流行し、19(大正8)年利藻も罹患した後継者問題が浮上した。斎藤元大君や木村と協議し、長男・利之に決定。利之は関西学院から東京美術学校製版科に転学する。

20(大正9)年家主が家屋と工場の明け渡しを要求。木村は「光村出版部」の高級印刷技術に期待し、新工場建設を支援した。同社の評価は益々高まり、注文も激増した。従業員を増やし、高品質機械を増設しなければならない。他社との競争もある。

利藻は身の回り品も芸術も無料頒布の本でも一流でなければならない。金をかける。工場の機械も同様だ。経営感覚に優れた常識人・木村はこの投資を承認できない。21(大正10)年利藻は木村に無断で小寺謙吉から5万円の融資を受けた。機械を購入し、工場と製版部を拡張し、従業員も増やした。新取引先は、鉄道省、講談社、国際情報社など。仕事は好調だが、やはり資金繰りに困る。

23(大正12)年9月1日関東大震災。「光村出版部」営業部と住居は全焼したが、工場と販売店は無事だった。販売店社員たちが街に出て被災状況を撮影し、利藻に「震災絵ハガキ」印刷と発売を促す。たちまち売り切れ、注文が殺到した。現金取引にして資金難を解消できた。そこにまた災難、不良少年たちが工場に放火した。震災で巨利を得ていることに義憤、という話だが、真偽は不明。利藻は火災保険金を取引先支援に回した。

帝室美術館から撮影・印刷を任せられ、美術印刷では独占状態になる。オフセット印刷機とグラビア印刷機を発注。木村は今回も難色。世界的不況のうえ、すぐに復興景気は収まる、と考える。援助はするが、承認なしの借り入れや機械購入は認めない、と念を押す。

26(大正15)年大正天皇崩御。昭和改元早々金融パニック、銀行取り付騒動が起きる。木村の予想を超える規模である。神戸では鈴木商店が破綻し、川崎造船所も窮地に陥った。「光村出版部」では取引先の国際情報社が倒産し、給料遅配になる。利藻は木村に支援を求めるが、拒絶された。

27(昭和3)年利藻は斎藤に木村への仲介を依頼。木村の条件は利藻引退。結果、利之が経営トップになり「光村原色版印刷所」と改称、三菱製紙の傘下に入る。

利藻は独立して「光村美術出版部」を立ち上げ、美術品複製と出版を続ける。9月から日本橋、大阪、神戸の三越で展覧会・販売会を開催し、大成功を取める。改めて技術力を証明した。だが、「光村原色版」の機械・設備使用は許されなかった。新作を制作できず、旧作品を販売する

みなと元町タウンニュース	2022年(令和4年)10月2日	みなと元町タウンニュース	2022年(令和4年)10月2日	みなと元町タウンニュース	2022年(令和4年)10月2日
海という名の本屋が消えた（108）	平野義昌	海という名の本屋が消えた（108）	平野義昌	海という名の本屋が消えた（108）	平野義昌

のみ。30(昭和6)年「光村美術」活動停止。利藻は完全引退し、吉村秘書の故郷・北多摩郡砧村に隠棲した。

31(昭和7)年斎藤の斡旋により、利藻は「光村原色版」から毎月生活費を支給された。同年世田谷区に転居。サボテン栽培や兎、鶉、蝸牛の飼育などを趣味にして暮した。気がかりは三菱の「光村原色版」支援保障。斎藤を通じてたびたび三菱と交渉するが、33(昭和9)年木村が引退し、翌年死去。交渉事は立ち消えになる。

32(昭和8)年斎藤は内閣総理大臣に就任し、翌年退任。34(昭和10)年内大臣就任。35(昭和11)年2月26日、陸軍将校クーデター「二・二六事件」で殺害される。

〈長き生涯のうち恩人先輩または友人数多かりしも、良く人を容れ、慈父に抱かれし感ありしは斎藤子爵その人なりし。〉註1

利藻心配の「光村原色版」は33年新工場を操業する。35年株式会社となり、利之は取締役技師長、39(昭和15)年支配人就任。色刷り印刷が増加し業績は順調。戦時統制経済下でも軍需が激増した。敗戦後の47(昭和22)年利之は社長、49(昭和24)年には会長就任。現在の「光村印刷株式会社」である。

利藻の妻・藤子は45(昭和20)年1月病死、65歳。夫婦共に過ごした時間は短いが、5人の子を成した。水戸徳川家のお姫様と成り上がり経済人の御曹司、若くしての政略結婚だった。新婚当初から夫は趣味と事業に熱中し、花柳界に遊び、愛人と暮らした。

〈……いまにいたりては、いかに陳謝するも、およびざる次第なり。〉註1

豆千代「しょう」は京都の染物商主人に落籍されていた。37(昭和13)年頃主人が亡くなり、東京に戻った。利藻の三男・利弘の結婚資金を用立てている。時々利藻宅を訪問し、話し相手をした。51(昭和26)年利藻は生涯の愛人・恩人を養女として入籍した。59(昭和34)年「光村しょう」死去。

51年、利藻引退後も献身的に世話をした秘書・吉村も養女入籍。

いずれも、自分の死後は光村家が生活の面倒を見るだろう、との配慮である。

利藻の実母シマは光村家を去った後、他家に嫁ぎ、千代を出産。1915(大正4)年取り持つ人がいて、利藻はシマ・千代と対面し、その後も親交した。

北長狭通5丁目の神戸本邸は料亭「菊水楼」になり、繁盛した。開業時期や経緯は不明だが、元町の料亭「三ツ輪」が本体。『神戸商工名鑑 大正十四年』(神戸市役所商工課)に「菊水」の記載がある。店名は楠木正成にちなむ。座敷に「伊勢」「高砂」「鶴」「桜」など日本歴史・自然・文化ゆかりの名をつけ、豪華なインテリアを施し、多くの彫刻・美術品を配した。神戸空襲で焼失。

谷崎潤一郎は『細雪』で大阪の客人を接待。〈……(芦屋から)ハイヤアを神戸まで飛ばして、花隈の菊水へ行った。(中略)神戸見物と云う意味では菊水が一番珍しかろう、と云うことになった訳であった。〉註2

海野十三(うんの・じゅうざ) (補註)は東京大空襲で被災。娘を鹿児島 の夫宅まで汽車で送る途中、車窓から神戸の焼け跡を見た。〈……県庁は残っているが、菊水は空し。惜しいことだ、あのコレクションは。〉註3

お客の反応も好悪様々だったようだ。店はPR冊子（註4）で店名由来、経営方針、各座敷意匠を説明している。絵はがきも発行した。元の所有者・

利藻は旧宅の行く末を気にかけてだろうし、評判も耳にしただろう。

〈……燭爛にして俗悪なる家具調度をもって外人や趣味低き人の間に評判となりしよしなれど(後略)〉註1

1950(昭和25)年安雲が病床にあった利藻とはがき文通を始める。利藻に記憶を整理して語らせるべく、「一日一話」の通信にした。二人は毎日書いた。利藻は目が衰えると、吉村に助けられて返信した。註5

55(昭和30)年2月21日、利藻は心臓性喘息のため死去。臨終に立ち会えたのは、吉村、中条他数名だった。

読者諸氏は利藻の一生をどう思われるか。「徹頭徹尾、阿呆遊びに終始して、風流などという点は目くそほどもなく、ただバカバカしい」(註6)だろうか。芸術を愛する桁外れの贅沢を「精神悠々」(註7)とする声がある。「金を稼ぐことではなく、使うことにだけ情熱を傾け」(註8)、写真・印刷技術発展に貢献したことは確かだ。陳舜臣は、開港場気質＝新しがり屋、よく言えば開拓者精神、悪く言えば軽佻浮薄・野次馬精神、と評する。〈神戸人の新しがりやと軽佻浮薄を、顕微鏡で拡大してみせたような人物だった。〉註9

それにしても利藻の蒐集品散逸は残念なこと。同時代の池長孟(1891～1955年)の南蛮美術、松方幸次郎(1865～1950年)の西洋美術と浮世絵はよく残った、と思う。

利藻自身の回想を紹介しておく。〈……苦労なく育ち、父の余恵により幸福なる地位を得たる次第なりしが、修養および苦労が零なりしたため、たちまち失脚そののち多少世間の苦労の味を知り得て、ようやく人情の一部分を諒解し得たるを感ず。〉註1

長男・利之は利藻評伝を完成して語る。〈私は父の残した負債のあと始末に心身ともに困憊しつくした。(中略)ほんとうに“ああしんど”である。〉註1

- 註1 増尾信之『光村利藻伝』光村原色印刷所 1964年
- 註2 谷崎潤一郎『細雪』『谷崎潤一郎全集』第20巻 中央公論新社 2015年
- 註3 『海野十三戦戦日記』中公文庫 2005年
- 註4 『菊のかをり』菊水楼発行 出版年不明
- 註5 Web「復刻・印刷史談会32」『人間光村利藻』https://www.jfpi.or.jp/files/user/pdf/printpia/pdf_part3_01/part3_01_032.pdf
- 註6 木村毅『財界もやま話』築土書房1956年
- 註7 戸板康二『ぜいたく列伝』文藝春秋1992年
- 註8 鹿島茂『明治の革新者～ロマン的魂と商業～』ベスト新書2018年
- 註9 陳舜臣『神戸ものがたり』平凡社ライブラリー1998年
- 補註 海野(1897～1949年、本名佐野昌一)は徳島県出身、神戸一中から早稲田大学理工学部卒。通信省電気試験場に勤めながら、技術書の他、探偵小説、科学小説を執筆。引用文は適宜新字新かなに直した。
- 写真 晩年の光村利藻。前掲〔註1〕より。



みなと元町タウンニュース	2022年(令和4年)10月2日	みなと元町タウンニュース	2022年(令和4年)10月2日	みなと元町タウンニュース	2022年(令和4年)10月2日
みなとMOIOMACHIケンチクさんぽ	vol.15	みなとMOIOMACHIケンチクさんぽ	vol.15	みなとMOIOMACHIケンチクさんぽ	vol.15

みなとMOIOMACHIケンチクさんぽ

商店街の中の小さな映画館

この夏の終わりに、元町商店街にある元町映画館で映画を観てきました。戦中最後の沖縄県知事として知られ、神戸市出身、私の母校OBでもある島田叡の生涯を描いた作品が上映されていたからです。これまでも興味のある映画が上映されていたのですが、見逃してばかりで、これがこの映画館の初めての利用でした。

チケットを購入してから、商店街で昼食を済ませ、上映時間が近づいた頃に戻ると、入り口前には結構な人だかりが出来ていました。通りにあふれ出したリーフレットの棚やポスターを張った立て看板をすり抜けるようにしてエントランスに入りました。そこは、シネコンを利用することが多い私にとって、映画館と呼ぶにはあまりに小さな空間でした。トイレブースの扉がエントランスに面しているなんて、この先の客席は一体どんな空間になっているのか？車いす用座席を含めて67席のホールは、荒く塗られたペンキのムラが見えるほどの天井高さ、スクリーンの前にはなぜか舞台があって、まるで小さな芝居小屋に入ったようです。壁は吸音材をガラスクロスで覆ったものを天井と同様の黒いペンキで塗って仕上げとしたもの。果たしてこのつくりで、音響は大丈夫なのか？好奇心は増すばかりです。やがて座席が全て埋まり、



元町映画館エントランス前

みなと元町タウンニュース	2022年(令和4年)10月2日	みなと元町タウンニュース	2022年(令和4年)10月2日	みなと元町タウンニュース	2022年(令和4年)10月2日
みなとMOIOMACHIケンチクさんぽ	vol.15	みなとMOIOMACHIケンチクさんぽ	vol.15	みなとMOIOMACHIケンチクさんぽ	vol.15

みなとMOIOMACHIケンチクさんぽ

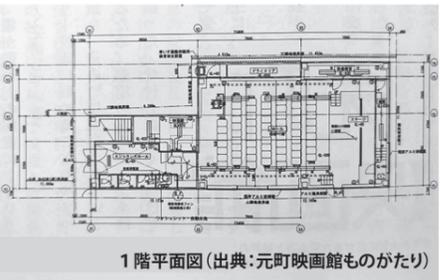
公益社団法人 日本建築家協会 近畿支部

兵庫地域会 地域まちづくり委員会

照明が消され、真っ暗になるとスクリーンだけが浮かび上がり、さっきまでじろじろ眺めていた壁や天井は見えなくなり、音響なども全く気にならず、気が付くとすっかり映画の中に入り込んでいました。客席のお互いは暗くて見えないけれど、同じように固唾をのんだり感動したりしている気配が伝わってくるような気がして、コンパクトな空間の中で映画鑑賞の体験を共有している感じが心地よく思えました。エンドロールを見ながら、映画の余韻にふけりつつ、映画館の雰囲気味わっていました。ホールを出て、エントランス近くに置いてあった可愛い装丁の「元町映画館ものがたり」という本を購入し、映画館を後にしました。

この本は2010年8月に開館した元町映画館の約10年の軌跡を記録し、開館10周年の節目に発行されました。

勤務医だった堀忠氏が映画館をつくろうと思いつち、元町商店街の中で廃墟化していた小さなパチンコ屋の2階建てビルを取得、それから資金と建物の設計者を含めた仲間を集め、工事完了を経てオープンに至るまで、この本の中でそれらの経緯が描かれています。建物に関しては、リノベーションの制限の中で、映画館という用途に対するさまざまな法規制をクリアすべく苦心した様子が伺えます。またお金が不足していたことから、仕上げのペンキ



1階平面図(出典：元町映画館ものがたり)

ちをつなぐ役割を果たしました。映画興行のプロが誰もいないなか、それでも誰しものがなにごとかのプロであり、法人の定款づくり、商業デザイン、電気工事、印刷、ボランティアの呼びかけ等、それぞれに関われること、出来ることをした人たちが、チームの一員として、その後の運営で力を発揮していったようです。

今、各地で行われているまちづくりにおいて、人々が集う場をつくるうえで、建築家に関わらなければいけない部分は少なくともありません。ただ、それは長いプロセスにおけるほんの一部分でしかなく、建物が完成した後も、地域の人たちがいるんな特技を持ち寄り、その場所の魅力を高めていくことが何よりも重要です。そんな関わりしろと変わりしろを備えた、しなやかな建築をつくっていきたいものです。

元町映画館は、開館以来、体制を整備し、組織を強化しつつ、さまざまな企画を仕掛けて

塗りや棚づくり等をスタッフのDIYで行ったうえで、廃館した映画館から椅子を譲り受けたり、中古で映写機を揃えたりと、開館まで本当に大変な道のりだったことが分かります。

映画館が出来るまでの過程を知り、入館した時に抱いた好奇心のような違和感の理由が分かりました。小さな映画館には不釣り合いな舞台は、法規制に適合させるために出来たようです。ただ、その舞台は、結果として今や日本一イベントが多いと言われるようになったこの映画館を特徴づける存在になっているようで、「ドライブ・マイ・カー」の濱口竜介監督をはじめ多くの映画監督や俳優がここで舞台挨拶をされていることも知りました。

また、訪れた際はコロナ感染症対策として閉鎖されていましたが、開館から数年後にテナント契約が切れた2階部分が、ロビー、イベントルームとして利用されているようです。いわば余白のスペースがイベントの出来る映画館としているんな人、コトをつなげるきっかけとなったようです。

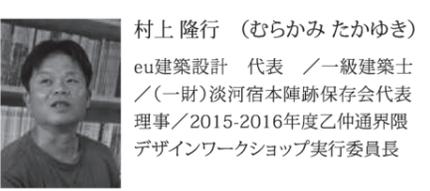
こうした経緯を知るにつれ、一見無駄で都合の悪い諸条件は、工夫次第で逆に良い塩梅の建築空間を生み出す要因にもなり得るように思えます。古い海運業ビルを改装して出来た乙仲通りの魅力的な店舗群を調査した時にも私たちは同じような印象を受けたものです。



いて、まさにまちづくりと呼べるような、社会や地域を変えていく活動を続けておられます。

昨年末に行われた濱口竜介監督との対談の中で林支配人は、「コロナ後に、もっと地域との関わりや、私たちの目指す公共性を獲得するためにどう開かれていくべきか、映画館を映画で埋め尽くさなくてもいいのではないか。」と、とても興味深い発言をされています。

コロナ禍での休業要請を乗り越えた元町映画館に、また映画を観に行きたいし、この土地で展開されていく、これからの新しいものがたりを注視していきたいと思います。



村上 隆行（むらかみ たかゆき）

eu建築設計 代表 /一級建築士 /（一財）淡路宿本陣跡保存会代表理事 /2015-2016年度乙仲通界隈デザインワークショップ実行委員長